

リポート Report

大磯町郷土資料館だより

1999・10・30

18/19

もくじ

- | | |
|--------------------|----|
| ◇資料館の課題と展望 | 2 |
| ◇写真で見る大磯の移り変わり③ | 10 |
| ◇巡回展「弥生の幕開け」・トピックス | 11 |
| ◇行事案内・資料の受入 | 12 |



〈はじめに〉

本年度、大磯町郷土資料館は開館11年目を迎えた。昭和63年10月に開館して以来、さまざまな活動を通して多くの方々からご利用いただいております、累計入館者は398,894人（平成11年9月30日現在）を数えている。しかし、10年という歳月のなかで資料館を取り巻く諸々の情勢は変わりつつあり、学芸活動から施設の維持運営にいたるまで、さまざまな場面において数多くの課題を抱えながら試行錯誤しているのが現状である。そこで、本稿では過去10年における館活動に伴う課題を省みることによって、資料館の今後を考える布石としたい。

〈役割の再考〉

当館は「湘南の丘陵と海」というテーマのもとで大磯と周辺地域を含む豊かな環境文化を明らかにするとともに、地域に根ざした資料センターとしての役割を担って開館した。基本的には社会教育施設としての位置づけであるが、観光的な役割を否定するものではなく、むしろ開館当初から積極的に対応してきたことも特徴のひとつである。観光資源の少ない小規模な町にとっては資料館の存在は大きく、折にふれて観光的な利用も積極的に受け入れている。また、博物館施設を目的としていないような視察においても、必ずといっていいほど視察先に組み入れられてきたことでも町の資料館に対する認識がうかがわれる。その意味では資料館の持つ役割は実に多様で、その役割は十分に果たしてきたといってもよいであろう。しかし、10年の歳月を経た今、館の性格と役割を再考すべき時がきている。それは、常設展示やさまざまな普及活動はもちろん、施設の維持管理を含めた総体的な方向性ということである。なお、当町では社会教育施設そのものが少ないため、各種講座や会議の場所として研修室の利用が集中してきた。平成11年度からは生涯学習館が運営を開始したため、これらの施設の機能も踏まえながら、当館の研修室の利用形態についても見なおす必要があるだろう。

〈常設展示について〉

前述のテーマにしたがって展示を構成している。当館では独立した開設準備室がなかっただけでなく、準備期間もごく短かったため、開館を意識した調査収集活動はほとんどできなかった。そこで取り入れた展示手法は通史的なテーマ展示であったが、実際には欠如

している時代も多く、粗雑さは否めない。もっとも、十分な準備のできる環境ではなかったために、通史的な取り扱い自体に無理が生じたことも大きな理由である。そして、解説は極力おさえ、実物と映像を中心とした体感的な空間づくりを目指したのである。エントランスホールに入り、長い展示ホールを抜けると常設展示室に至る。吹き抜けの高い天井のもとで、マツリブネと呼ばれる船祭りの山車が独特な雰囲気を出しており、こじんまりとした印象をもって入館した人々への意外性を演出しようとしている。無理強いするような解説も導線もなく、自由で開放的な展示空間は入館者に概ね好評であった。しかし、このような展示構成は、年月がたつと限界がくることもまた事実である。いわばギャラリー的な展示は、例えば観光客が訪れて大磯の雰囲気を概観的に浸るには有効だろう。しかし、問題意識をはっきりと掲げて「資料」を見にくる来館者や、小中学校で授業の延長上として訪れるには、いささか不親切で物足りなさを感じるであろうことは明らかである。その分、どんな些細なことでも学芸員が直接対応しながら補完することをうたっていたが、それがどこまで実行することができたのか、あるいはどのように評価されたのか十分に確かめるわけではない。

さらに、近年では「常設展示がいつも同じ」という声も多く聞かれるようになった。もちろん、開館当初から展示の限界は認識していたために、開館後10年目に常設展示室の展示替えをおこなう構想を持っており、町の総合計画の中に位置付けられていた。しかし、近年の緊縮財政の中で、計画そのものが見直されてしまったのである。加えて、ソフトの問題だけでなく映像モニターや照明などの機械設備に疲労が見えてきたことも大きな課題となっている。いずれにしても、今後、さらにメンテナンスや修繕に要する費用がかさむことが考えられ、館全体の維持管理の方針も合わせて検討していかなければならないだろう。ただし、それらの対応策として、平成8年度から新たに館内整理日を設けている。これは月初めに休館日を設定し、施設維持のための各種メンテナンスや展示資料のメンテナンスをおこない、あわせて資料の一部展示替えをおこなうという試みであった。しかし、これらはあくまでも一時的な対応策に過ぎず、根本的な解決策となるものではない。また、個々の細かい展示資料を替えても、

各コーナーのテーマや展示全体の流れを大きく変えるものではないため、展示替えに気づく人はほとんどいないのが実情である。

〈特別展・企画展について〉

開館した昭和63年度から平成9年度までは、年1回の特別展と数回の企画展をおこなってきた。翌10年度からは財政状況により特別展事業を休止しており、展示事業としては企画展のみとなっている。

展示の内容をみると10年間の傾向がよく分かる。特別展は、「常設展示でとりあげることでできないテーマ」として常設展示を補足し、大磯の文化特性をアピールすることを大きな目標とした。このような方針のなかで自ずと別荘地あるいは保養地としての性格が特筆されてきた。したがって、島崎藤村（第1回）、安田靉彦（第2回）、三井高棟（第3回）、吉田茂（第4回）、川瀬竹春（第6回）など、大磯に居を構えた著名人をテーマとした展示が中心となった。いずれの企画も学芸員は全くの専門外での展示であったが、幸いこれらは外から見た大磯のイメージに合致したようで、文化特性のアピールという目的は概ね達成できたのではないかと考えており、あわせて資料館の存在を周知する力とも成り得たと思っている。

一方、企画展では内からの視点を意識した内容を目指しており、学芸員の研究成果を還元することを大きな役割として進めてきた。ところが、実際には企画展を実施することで資料収集と資料化をおこない、当該資料を議論の俎上に提示するという役割が、いつのまにか第一義となってしまったことは否めない。本来ならば本末転倒と言わざるをえないものだが、限られた人員と時間の中での等身大の活動として容赦いただきたい点である。

しかし、ここ数年、特別展においても人物を中心に据えた展示から、「檻樓一紅絹からのメッセージ／西

相模の仕事着」（第7回）、「おばあちゃんの針仕事」（第9回）、「動物の生活と体のづくり」（第10回）といったテーマでおこなっており、企画展のコンセプトに非常に近い内容になってきた。単なる話題性や啓蒙性にてらうことなく、地域から得られた資料や情報を利用者に対していかに還元できるのかということが大きなテーマになっている。それは、10年の経過により資料が蓄積されたことで再認識されたテーマであり、展示の流れが変化しつつあるのはある意味では当然の結果といえる。

〈レファレンスについて〉

資料館の事業は、運営事務、維持管理、学芸活動、特別展、企画展、教育普及というそれぞれの事業に基づいて活動を行なっている。なかでも特別展や企画展などは、その準備期間を含めれば、最も時間を必要とする仕事であることは言うまでもない。しかし、日々の仕事の中で最も多く時間を裂くのはレファレンスだろう。

日頃からレファレンスの多さは実感していたが、実際にどれくらいの依頼があるのかを確認するため、試みにレファレンス票を作成して、平成9年度（平成9年4月1日～平成10年3月31日）の1年間の記録をとってみた。表1がその集計である。現在、当館には3名の学芸員（考古・民俗・自然）がおり、各自がそれぞれにレファレンスに対処している。担当分野の学芸員が在館していれば内容にあった担当者が対応するし、もちろんその方が望ましいことは言うまでもないが、専門外の職員でもさしつかえないような内容ならば、臨機応変に対応しているのが現状である。したがって、ここでは民俗を担当している筆者が受けたレファレンスのみを集計したもので、当館で受けたものすべてを集計しているわけではない。

これらは、直接来館された方はもちろん、手紙や電

月	件数	依頼者の内訳	主な内容	処 理
4	4	個人、当町役場	史蹟、文化財、石碑、地名	資料提供、展示解説、調査継続
5	3	個人、高校、TV局	別荘、祭礼、地名	資料提供、調査継続
6	5	個人、学習会、新聞社、企業	史蹟、文化財、別荘、施設管理	資料閲覧、資料提供
7	6	個人、大学、新聞社、県庁	古建築物、祭礼、地名、書籍	資料提供、現地案内
8	5	個人、当町役場	展示物、祭礼、人物	資料閲覧、資料提供、展示解説
9	3	個人、博物館、他市役所	所蔵資料、別荘、施設管理	思慮提供、施設案内、展示解説
10	11	個人、新聞社、企業、当町	祭礼、人物、遺跡、地名	資料閲覧、資料提供
11	3	個人、当町役場	文化財、人物	資料閲覧、調査継続
12	10	個人、大学、TV局、他町役場	人物、祭礼、海水浴、施設管理	資料提供、原稿作成
1	15	個人、新聞社、TV局	人物、祭礼、海水浴、著作権	資料提供、調査継続
2	7	企業、博物館、他市役所	施設管理、所蔵資料、展示物	資料提供、展示解説
3	13	個人、小学校、TV局、県庁	史蹟、所蔵資料、石造物、昔話	資料提供、講義、展示解説

表1 レファレンス集計

話での対応を含んでいるが、口頭で対応できるような軽易なものではなく、一応、資料の閲覧や提供などの作業を伴ったものを対象とした。表の分類上、レファレンス内容はまとまっているように見えるが、実際の内容は実にさまざまである。その場だけでは対処ができず、調査を継続して後日返答すること多い。博物館や担当分野の知識だけでは対応しきれないような壮大な、あるいは微細な内容まで含まれることも少なくない。また、資料の特別利用（撮影など）や貸し出しが伴うこともあるため、当然ながら手続き事務が付随することになる。したがって、筆者の個人的な感覚では、集計上の件数以上にほとんど毎日レファレンスの対応に追われているような印象である。

集計上では1ヶ月に平均約7件。だいたい2～3日に1件は仕事量のあるレファレンスを受けていることになる。当然ながら専門分野以外の内容も多く、自ずと学芸員1人の受け持つ分野は広範囲に及ぶこととなり、ひいてはレファレンスが他の業務を圧迫することも決してないとは言えない。しかし、レファレンスの多さは資料館に対する利用頻度の多さであり、多様な内容は利用者の知的好奇心の表れでもある。かつて、平塚市博物館に在職していた小川直之氏は、「地域博物館というのは、地域資料についての統合的な情報メディアとしての役割を期待されている」として、さらに学芸員は「町医者的な役割を要求されている」（小川 1986）と言及したが、まさにそのことを実感する状況である。他課に寄せられた問い合わせも、内容によっては資料館へ回されることが多い。これも窓口や具体的な回答内容が統一されるという意味では、小さな町ならではの利点として考えることもできる。少なくとも、ここではレファレンスに対処することについての「負担の度合い」を問題とするのではなく、どうすれば利用者にとって有意義でスムーズに対応ができるのかという建設的な議論が必要となつてこよう。

〈資料館の今後について〉

大磯町では、10月1日付で機構改革を実施した。係制を廃して班制に移行するという中で、文化財行政と町史編纂事業が資料館へ編入された。ここではその是非について論じるつもりはないが、館活動が大きな転換期を迎えていることは確かである。紙幅の関係から、ここではひとつひとつの課題を指摘し、さらに解決策を述べることもできないが、今後の資料館においての指針を総括しておくために、参考になるようないくつかの事例を確認しておこうと思う。

まず、静岡市立登呂博物館の事例は意義深い。登呂遺跡の場所に建つ博物館としてその名を知られた同館

は、昭和47年4月の開館以来、各地の博物館の先駆的な役割を果たしてきた。しかし、年月の経過により展示に魅力を失いつつあった現状を鑑み、平成6年3月にリニューアルオープンしている。ここでの最大の特徴は「見るだけの展示から、展示の場で実際に体験できる」（大村 1994、1995）という参加体験型の展示手法を取り入れたことにある。近年では参加体験型の事業を取り入れている博物館は決して珍しくはない。しかし、展示そのものの場において実現させたことは斬新であった。各地の博物館で目立ち始めているリニューアルのなかでは出色であると思われる。また、これらの展示の試みは、展示に付随したボランティア活動（体験指導ボランティア）に結びついており、さらなる活動の広がりが期待できる。筆者は、同館の学芸員の方から実際にご教示をいただきながら拝見したことがあるが、利用者の動向を緻密に分析したうえで従来の展示のあり方を真摯に見つめなおし、さらに博物館自身の意識改革を目指しながら活動の活性化をはかった経緯に感服させられた。そして、今までの展示イメージを打破した展示手法に驚きの連続であった。拝見した当日も、場所柄多く訪れていた観光客、特に子供たちにとってはたいへん好評のようであった。このような展示手法を行政として理解したことに対して敬意を表したいが、原点は何よりも職員の方々の熱意なくしては成し得ないということである。その意味では襟を正して当館自身の姿勢を省みる機会を与えていただけたとも思っている。もちろん、登呂博物館と大磯町郷土資料館が同じ環境にあるとは言えないので、登呂博物館のコンセプトをそのままの形であてはめることはできないが、指針としては十分に視野に入れておく必要がある。

また、平成11年4月29日から6月13日にかけて、相模原市立博物館において開催された企画展「都市化の中のくらし～生活様式と生活用具の変化～」も興味深かった。相模原市立博物館は、当初から東京近郊都市における博物館づくりを意識してきた館で、地理学担当の学芸員を配して、都市化が進むなかで変貌する生活用具（あるいは産業資料）にも視点をあててきた。今回の展示では、それら地道な収集資料の積み重ねの上に成り立ったものであるが、特に電化生活や洋式生活への変化をたどった居住空間の再現展示は見る者を圧倒的なリアリティーで引きつけていた。博物館関係者はもちろん、多くの市民からまたたいへん好評であったようだ。いわゆる「現代的視点に立った地域性の一つの表現方法」（浜田 1987）を巧みに体现した展示だったといえる。まさに今後の博物館における活動のあり

方の一端を示唆している好例である。

また、一方で大磯町郷土資料館の展示参観者や講座受講者の傾向をみると、自分の住む地域にこだわりながらも、実に広い視野を持ち、さらに博物館や行政に対しても広い視野と多彩な視点を持つことを望んでいるようである。このことは、平成8年度に開催した郷土史講座「衝突する伊豆半島と地震」において、町内外から大きな関心を寄せられたことを考えれば理解できる。内容は「伊豆半島」や「小田原地震」などの郷土色（地域色）を出してはいたが、実際には地球的規模での地学現象をとらえたものであった。つまり、受講者は「地球という大きなステージ」と「自分たちの生活の場としての地域」との相関関係をしっかりと把握している、もしくは把握しようとしているに他ならない。当館では、資料の寄贈に際して送付される礼状で「郷土の環境文化を明らかにするため（以下略）」と書いているが、この一文はまさに当館の方針が集約されていると言って良い。そこで、もう一度この「環境文化」のことばの意味を考えてみる必要がある。過去10年間に蓄積してきた多くの資料、明らかになりつつある多くの課題、そして今後の活動方針も、この「環

境文化」というテーマとは無関係ではありえないと考えるからである。

（当館学芸員）

引用・参考文献

- ・小川直之「情報センターとしての地域博物館」『民具マンスリー』第19巻5号 1986年 神奈川大学日本常民文化研究所
- ・大村和男「弥生時代へタイムスリップ 静岡市立登呂博物館／参加体験型ミュージアムへの改装」『ミュージアム・データ』No26 1994年 丹青研究所
- ・大村和男「歴史展示の曲り角―「参加体験ミュージアム」という展示手法の試み―」『民具マンスリー』第28巻9号 1995年 神奈川大学日本常民文化研究所
- ・『都市化の中のくらし～生活様式と生活用具の変化～』企画展パンフレット 1999年 相模原市立博物館
- ・浜田弘明「近郊都市の博物館づくりにおける二、三の私見」『民具マンスリー』第20巻4号 1987年 神奈川大学日本常民文化研究所

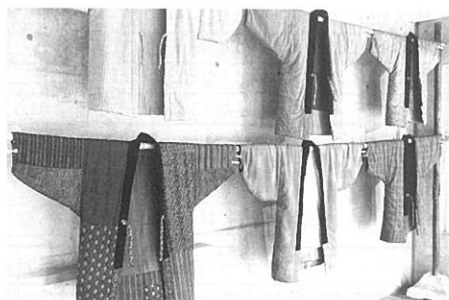
<活動のあゆみ>

特別展

回数 /	テーマ	期 間	入館者
第1回 /	「町屋園の日々―島崎藤村とその周辺―」	昭和63年10月26日～11月17日	5,779
第2回 /	「安田鞍彦の画と書―大磯に在りし六十余年―」	平成元年10月17日～11月12日	8,068
第3回 /	「城山荘と城山窯―昭和の残影―」	平成2年10月14日～11月11日	6,025
第4回 /	「大磯と吉田茂」	平成3年10月13日～11月10日	6,100
第5回 /	「相模湾の動物」	平成4年10月10日～11月22日	10,874
第6回 /	「初代 竹春展」	平成5年10月17日～11月21日	5,836
第7回 /	「檻樓―紅絹からのメッセージ／西相模の仕事着―」	平成6年10月16日～11月20日	9,254
第8回 /	「牧野富太郎と西相模の自然」	平成7年10月15日～11月29日	6,637
第9回 /	「おばあちゃんの針仕事」	平成8年10月13日～11月17日	6,719
第10回 /	「動物の生活と体のづくり―羽と歯を中心に―」	平成9年10月12日～11月16日	5,580



◀「安田鞍彦の画と書」



「おばあちゃんの針仕事」▶

企画展

回数 /	テーマ	期 間	入館者
第1回 /	「大磯再発見1 資料が語るもの」	昭和63年12月6日～平成元年1月29日	3,184
第2回 /	「叙情の人菊池重三郎ーよせられた書簡を中心にー」	平成元年4月18日～6月18日	7,579
第3回 /	「丘陵の動物ー生活史を中心にー」	7月11日～9月10日	5,344
第4回 /	「大磯再発見2 モノ・もの・mono」	12月12日～平成2年2月18日	3,630
第5回 /	「土器が語る縄文時代の湘南」	3月6日～4月8日	9,245
第6回 /	「昭和の風俗画家 長瀬寶の世界」	5月5日～6月3日	6,376
第7回 /	「館収蔵品による 大磯ゆかりの人々の逸品」	7月24日～9月2日	4,545
第8回 /	「ヤゴと小川・ため池の生きもの」	平成3年3月3日～4月7日	5,347
第9回 /	「土器が語る弥生時代の湘南」	5月5日～6月9日	5,294
第10回 /	「なつかしの風景Ⅰ 海と海水浴場」	7月21日～8月31日	4,450
第11回 /	「相模湾の漁船と船大工」	平成4年3月1日～4月5日	4,737
第12回 /	「なつかしの風景Ⅱ 家と町並み」	7月26日～9月6日	4,340
第13回 /	「湘南の考古資料展」	平成5年3月6日～4月4日	4,202
第14回 /	「館収蔵品による 大磯ゆかりの人々の逸品2」	4月27日～6月20日	6,333
第15回 /	「なつかしの風景Ⅲ 史蹟と名勝」	7月25日～9月5日	3,868
第16回 /	「新春資料展」	平成6年1月23日～2月27日	3,766
第17回 /	「雛人形展」	3月3日～4月3日	4,465
第18回 /	「雲の画家／山本瑛幾遺作展」	5月5日～6月12日	6,313
第19回 /	「湘南の貝化石」	7月17日～9月4日	3,903
第20回 /	「地中からの足音ー近年の発掘調査の成果からー」	平成7年3月19日～6月11日	9,002
第21回 /	「オタマシー神のすがたー」	7月30日～9月10日	3,606
第22回 /	「めんこーなつかしのヒーローたちー」	12月3日～平成8年2月18日	5,161
第23回 /	「雛人形展」	2月25日～4月7日	5,429
第24回 /	「アオバトと照ヶ崎」	5月26日～6月9日	1,498
第25回 /	「徳利」	平成9年3月16日～4月27日	4,616
第26回 /	「鉄 KUWAー土の記憶ー」	7月27日～9月7日	3,064
第27回 /	「雛人形展」	平成10年2月15日～4月5日	5,676
第28回 /	「相模湾の貝類Ⅰー大磯海域にすむマキガイー」	7月12日～9月6日	3,102
第29回 /	「日本列島絵はがき紀行」	10月18日～12月6日	6,160
第30回 /	「地中からの足音Ⅱー近年の発掘調査の成果ー」	平成11年3月7日～4月11日	2,758
第31回 /	「相模湾の貝類Ⅱ 大磯周辺海域の二枚貝」	7月21日～9月5日	3,235
第32回 /	巡回展「弥生の幕あけ」	11月7日～11月28日	(予定)
第33回 /	学習参考資料展「かわってきたくらしの道具」	平成12年1月16日～3月26日	(予定)

ミニ展示

回数 /	テーマ	期 間	入館者
第1回 /	「国府祭」(写真展)	平成8年4月7日～5月12日	4,150
第2回 /	「手織りのストール展」	平成9年1月7日～3月30日	6,355
第3回 /	「大磯の道祖神祭」(写真展)	平成10年1月7日～3月29日	6,894
第4回 /	「ちょっと なつかしいもの」	平成11年4月25日～6月20日	5,785
第5回 /	「ー館収蔵品によるー大磯ゆかりの人々の逸品3」	10月17日～11月3日	(開催中)

講演会

テーマ	期 日	講 師	参加者
「大磯時代の藤村先生と静子夫人」	昭和63年11月6日	東洋大学 伊東一夫氏	120
「国府関係の神社について」	平成元年3月26日	國學院大学 木下良氏	40
「おいそ文学点描」(朗読)	5月21日	俳優 福田豊土氏	100

「美と知恵 靱彦のひとと芸術」	平成元年10月29日	作家 沢野久雄氏	98
「湘南地方における縄文文化研究の歴史」	平成2年3月18日	日本考古学協会 杉山博久氏	58
「竹久夢二の世界と長瀬寶」	5月27日	弥生美術館 鹿野琢見氏	69
「三井高棟と城山荘」	10月28日	東京経済大学 中村青志氏	98
「大磯丘陵 水辺の生きもの」	平成3年3月14日	丹沢箱根陸水研究会 石原龍雄氏	56
「大磯と日本のセミ類」	8月11日	平塚市博物館 浜口哲一氏	33
「政治家としての吉田の業績」	11月3日	立教大学 北岡伸一氏	76
「相模湾の動物について」	平成4年10月10日	野生水族繁殖センター 廣崎芳次氏	37
「初代川瀬竹春と中国陶磁」	平成5年10月17日	東京国立博物館 矢部良明氏	130
「作品解説 紅絹からのメッセージ」	平成6年10月23日	キルト作家 前田順子氏	73
「野良着の用と美」		秋田民俗学会 日浅治枝子氏	
「牧野富太郎その業績と人柄」	平成7年10月15日	東京都立大学 小野幹雄氏	73



◀「国府関係の神社について」



「おいそ文学点描」▶

郷土史講座

テーマ	期 日	講 師	参加者
「吉田茂を育てた人」	平成2年3月16日	当館館長	38
「大磯の縄文人」	3月23日	当館学芸員	33
「城山荘と城山窯」	3月30日	当館学芸員	32
「大磯の石造物について」	平成3年2月23日	大磯中学校 飯田善雄氏	45
「別荘を構えた人たちのこと」	3月2日	当館館長	45
「大磯、平塚の地名から歴史を考える」	3月16日	大磯町文化財専門委員会 鈴木良一氏	40
「大磯のすまいとくらし」	平成4年2月15日	東海大学 稲葉和也氏	38
「大磯宿のよもやま話」	2月22日	当館館長	33
「近年の発掘調査の成果から」	2月29日	当館学芸員	32
「中世の城郭から見た相模の国」	平成5年2月27日	平塚市博物館 関恒久氏	25
「考古資料から見た古代の西相模」	3月6日	平塚市遺跡調査会 明石新氏	33
「箱根旧街道の石畳」	3月13日	箱根町立郷土資料館 大和田公一氏	25
「相模人形芝居 足柄座」公演	平成6年3月5日	相模人形芝居足柄座	41
「地球の歴史－施設見学」	平成7年3月28日	生命の星・地球博物館	29
「西相模の近代史①鉄道が遺したものたち」	平成8年2月3日	当館学芸員	20
「西相模の近代史②箱根の別荘地開発」	2月17日	箱根町立郷土資料館 鈴木康弘氏	15
「西相模の近代史③現地見学」		元小田原市文化財保護委員 田代道彌氏	
「衝突する伊豆半島と地震①」	平成9年2月8日	寒冷地形談話会 平井昌行氏	延148
「衝突する伊豆半島と地震②」	2月15日		
「神奈川県の道祖神祭」	平成10年2月15日	國學院大学 小川直之氏	44
「食の民俗学－納豆・鮭・茶－」	平成10年11月22日	東洋大学短期大学 山崎祐子氏	21
「民俗とことば」		相模民俗学会 和田正洲氏	

子ども歴史教室

テーマ	期 日	講 師	参加者
「水をめぐる人々の生活」	平成元年 8 月 1 日	平塚市博物館 明石新氏	40
「土器づくり」	8 月 2 日	当館学芸員	40
「施設見学」	8 月 3 日	寒川浄水場、相模川ふれあい科学館	39
「古代人の住まいと生活」	平成 2 年 8 月 2 日	茅ヶ崎市教育委員会 大村浩司氏	28
「施設見学 堅穴住居址の構造」	8 月 3 日	横浜市三殿台考古館 今井康博氏	28
「堅穴住居をつくろう」	8 月 4 日	当館学芸員	28
「古墳時代を知ろう」	平成 3 年 8 月 1 日	茅ヶ崎市教育委員会 大村浩司氏	29
「施設見学 古墳を見に行こう」	8 月 2 日	秦野市立桜土手古墳展示館 山本守男氏	30
「古墳時代の衣服をつくろう」	8 月 3 日	当館学芸員	28
「昔話と伝説① おばけと妖怪の話」	平成 4 年 8 月 3 日	川崎市市民ミュージアム 岡谷典子氏	33
「昔話と伝説② 金太郎伝説をさぐる」	8 月 4 日	南足柄市史編纂委員会 内田清氏	31
「土器をつくろう①」	平成 5 年 8 月 2 日	当館学芸員	延79
「土器をつくろう②」	8 月 3 日		
「日本の自然史」	平成 6 年 8 月 2 日	東京都立大学 菊地隆男氏	20
「大磯の貝化石と大地のおたち」	8 月 3 日	当館学芸員	20
「鳥の進化 鳥の模型づくり①」	平成 7 年 8 月 3 日	当館学芸員	延30
「鳥の進化 鳥の模型づくり②」	8 月 4 日		
「The 金次郎① 金次郎像の不思議」	平成 8 年 8 月 7 日	報徳博物館 木龍克巳氏	延29
「The 金次郎② 史蹟めぐり」	8 月 8 日		
「縄文土器をつくろう①」	平成 9 年 8 月 5 日	当館学芸員	延50
「縄文土器をつくろう②」	8 月 6 日		
「縄文土器をつくろう③」	8 月 29 日		
「さわってみよう！昔の道具」	平成10年 8 月 5 日	江戸民具街道 秋澤達雄氏	22



◀「堅穴住居をつくろう」

「さわってみよう！
昔の道具」▶



体験教室

テーマ	期 日	講 師	参加者
「土器づくり教室（試作）①」	平成 3 年 3 月 23 日	当館学芸員	延18
「土器づくり教室（試作）②」	3 月 30 日		
「土器づくり教室（試作）③」	3 月 31 日		
「ワラゾウリをつくろう」	平成 4 年 3 月 7 日	技術伝承者 松本安太郎氏 土方考策氏	9
「巣箱をつくろう」	3 月 8 日	獣医師 中山和也氏	8
「ワラゾウリをつくろう」	9 月 9 日	技術伝承者 土方考策氏	10
「ワラゾウリをつくろう」	平成 5 年 9 月 8 日	技術伝承者 土方考策氏	18
「ワラゾウリをつくろう」	平成 6 年 9 月 8 日	技術伝承者 土方考策氏	9
「ワラゾウリづくり」	平成 7 年 9 月 8 日	技術伝承者 土方考策氏	10
「ワラゾウリづくり」	平成 8 年 9 月 6 日	技術伝承者 土方考策氏	8
「機織りの実演」（体験）	11 月 17 日	技術伝承者 大谷タケ氏	23
「ワラゾウリづくり」	平成 9 年 9 月 5 日	技術伝承者 土方考策氏	5

自然観察会

テーマ	期 日	講 師	参加者
「初夏を迎える谷戸と動物と花の観察」	平成2年6月24日	県自然観察指導員 大屋親雄氏	40
「アオバトと初秋の雑木林の観察」	9月9日	草友会 奥村陽子氏	35
「冬の野鳥と越冬する虫の観察」	平成3年2月17日	草友会 山村絢子氏	26
「春の土手に咲く花」	5月12日	草友会 奥村陽子氏	10
「ハルゼミとオトシブミの不思議」	6月9日	丹沢自然保護協会 渡辺京子氏	28
「アオバトと町中の自然」	7月21日	丹沢自然保護協会 青木雄司氏	20
「大磯で越冬する野鳥の見分け方や生活」	12月8日	日本野鳥の会 田端裕氏	12
「初夏の花と虫」	平成4年5月17日	千賀修二氏	12
「ヤマユリとアゲハチョウ」	7月19日	千賀修二氏	17
「ヒガンバナとトンボ」	9月27日	千賀修二氏	15
「巣箱の中をのぞいてみよう」	12月20日	獣医師 中山和也氏	10
「冬芽と倒木で越冬する虫」	平成5年2月21日	高橋一公氏	12
「家から外へ一歩足を運んでみよう」	9月12日	エフシージー総合研究所 川上裕司氏	22
「ミクロの世界を覗いてみよう」	11月28日	日本大学 中嶋睦安氏	18
「巣箱をつくろう」	12月12日	獣医師 中山和也氏	12
「動物観察ことはじめ」	平成6年2月20日	獣医師 中山和也氏	6
「大磯地学めぐり①」	3月13日	当館学芸員	15
「水辺にすむ虫」	7月24日	神奈川県立博物館 荻部治紀氏	19
「アオバトの生態観察」	10月9日	日本野鳥の会 田端裕氏	10
「木の実と落葉のいろいろ①」	12月10日	獣医師 中山和也氏	延34
「木の実と落葉のいろいろ②」	12月11日	獣医師 中山和也氏	延34
「大磯地学めぐり②」	平成7年3月19日	地質学者 甘粕栄司氏	8
「海岸で貝を拾おう」	6月4日	葉山しおさい博物館 池田等氏	30
「野山の虫を観察しよう」	9月10日	エフシージー総合研究所 川上裕司氏	10
「木の実を使ってクリスマスツリーをつくろう①」	12月9日	獣医師 中山和也氏	延59
「木の実を使ってクリスマスツリーをつくろう②」	12月10日	獣医師 中山和也氏	延59
「虫窟の化石しらべ①」	平成8年3月9日	地質学研究家 金城紀之氏	延19
「虫窟の化石しらべ②」	3月10日	地質学研究家 金城紀之氏	延19
「アオバトの生態観察」	6月9日	日本野鳥の会 田端裕氏	17
「植物採集と押し葉標本の作成①」	10月17日	当館学芸員	延30
「植物採集と押し葉標本の作成②」	10月24日	当館学芸員	延30
「植物採集と押し葉標本の作成③」	10月31日	当館学芸員	延30
「木の実、落ち葉を使ってクリスマスリースをつくろう①」	12月14日	獣医師 中山和也氏	延46
「木の実、落ち葉を使ってクリスマスリースをつくろう②」	12月15日	獣医師 中山和也氏	延46
「鳥のハネを研究しよう①」	平成9年6月14日	当館学芸員	延10
「鳥のハネを研究しよう②」	6月15日	当館学芸員	延10
「春を探しに高麗山へ行こう」	平成10年3月15日	元大磯中学校教諭 渡辺良子氏	19
「海岸で貝を拾おう」	7月28日	相模貝類同好会 福田良昭氏	19



◀ 「春を探しに
高麗山へ行こう」



▶ 「海岸で貝を拾おう」

写真で見る大磯の移り変わり ③



化粧坂（左：明治後期～大正初期、右：平成9年） 旧東海道の面影が残る貴重な場所であり、坂の途中には虎御前が使ったという化粧井戸も残されている。写真はいずれも平塚方面を見たもので、前方に鉄道線路が横切っている。昭和54年に地下道となるまでは「大踏切（おおふみきり）」と呼ばれていた。



南本町（左：大正7年、右：平成9年） 左の写真は安藤広重の描いた東海道五十三次を写真で迎った「東海道」（大正7年刊）に掲載された当時の家並み。右の写真は中南信用金庫屋上から撮影したもの。なお、南本町では昭和13年に国道1号線（海側、写真左手）を拡幅している



鴨立沢（左：明治中期、右：平成9年） 西行法師ゆかりの景勝地として古くから知られていた。沢は岩盤が露出し特異な景観を呈していた。現在、橋は暗渠となっているため、かつての面影は失われている。

（提供 飯田福信氏）

巡回展

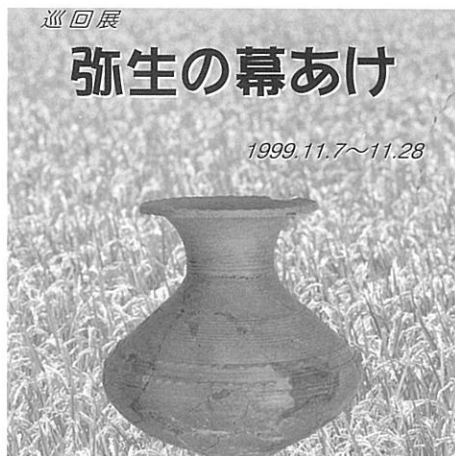
「弥生の幕あけ」

大磯町郷土資料館では、平成11年11月7日（日）から28日（日）まで、巡回展「弥生の幕あけ」を開催いたします。

弥生時代は、稲作米食の開始や金属器の使用などによって農耕社会の基礎を築き、現在までにいたる日本の生活要素の根幹を形成しました。まさに日本列島の歴史の上で、文化の大きな変容をもたらした時代といえるでしょう。

今回の展示では、神奈川県内各地の発掘調査等によって得られた資料のうち、縄文時代晩期から弥生時代中期中頃の遺物を中心に展示を構成し、神奈川県域で本格的な農耕社会に入るまでの足取りをたどります。

なお、本展示は（財）かながわ考古学財団と大磯町郷土資料館の共催による巡回展として開催されるもの



です。また、期間中には、小田原市教育委員会の大島慎一氏による「土器からみた弥生のあけほの」と題した記念講演会を開催いたしますので、どうぞふるってご参加ください。

【トピックス】

◇新しい講座

平成11年度から、当館主催の講座において新しい試みを始めました。ひとつは「民俗に親しむ会」です。これは、民俗資料の整理をとおして、民俗に親しんでもらう会です。今年度は当館で豊富に所蔵している衣服（着物など）の整理作業をしていただくことにしました。地域の方々がお持ちの情報や知識を提供していただくことによって、資料そのものを活き返らせ、そして、さまざまな活用の可能性を模索しようというものです。しかし、単なるボランティアではなく、資料と向き合うことによって、そこから私たちが忘れていた精神をよみがえらせ、あるいは新しい発見を期待し、さらに作業そのものに楽しさを見つけることができれば最高です。

また、もうひとつは「草と木の調査」です。これは



衣服の整理作業風景

20種程度の植物を選定して分布調査をおこない、さらに現在の状況と過去に調査された資料とを比較しながら植物群落の遷移について考えるものです。つまり、身近な生き物の名前や生態を知る機会としながら、種間や帰化植物の分布状況を明らかにすることを大きな目的にしています。

いずれも年間を通して継続的な活動をしようという試みで、参加者の募集にあたっては年間登録制（会員制）を初めて採用しました。現在までの活動は双方ともにたいへん順調です。蓄積された成果を前に、さまざまな夢が広がっており、今後の資料館活動の可能性も大きく膨らみつつあります。

◇一部展示替え

このほど、常設展示室の小コーナーの展示替えをおこないました。これは、例年実施している博物館実習生による実技実習の一環としておこなったものです。本年度は4大学6名の実習生により、企画から展示、リーフレット作成まで、すべて自らの手で完成させました。展示テーマは「ハレの『膳と椀』」です。結婚式や祭礼、葬式などの特別な日（ハレの日）に使われていた膳椀と、それに盛られる料理、あるいは膳椀の所有形態などを問題意識に据えた内容です。テーマ設定から展示構成、解説文やキャンペーンづくりまで、その過程にはさまざまな試行錯誤がありました。ささやかなコーナーですが、実習生たちの熱意もあわせて感じとっていただければ幸いです。

【行事案内】

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧ください。館へ直接お問い合わせ下さい。

▼竹工作教室（無料、当日自由参加）

『竹のおもちゃづくり』

11月21日（日） 午前10時～午後2時

竹を使って、竹トンボ、ブンブン、ウグイス笛などの昔なつかしいおもちゃを作ります。参加は自由ですので、ぜひお立ち寄りください。なお、当日は城山公園祭りを開催しており、園内ではさまざまな催しがあります。詳しくはチラシ等をご覧ください。

▼巡回展（秋季企画展）

『弥生の暮あけ』

11月7日（日）～28日（日）

神奈川県内各地の縄文時代晩期から弥生時代中期頃までの遺物を中心に展示します。今回の展示は（財）かながわ考古学財団と大磯町郷土資料館の共催する巡回展として開催します。なお、詳細は本誌11頁をご覧ください。

【資料の受入】

（寄 贈）ご協力ありがとうございました。

高 麗	片野直三氏	コメビツ
大 磯	西海 誠 氏	箆筥、膳、蚊帳 他
大 磯	斎藤安之助氏	看板
大 磯	木村純子氏	衣類、書籍、蝶標本 他
大 磯	飯田福信氏	書籍 他
大 磯	加藤勝蔵氏	オキボッコ 他
大 磯	竹永紋子氏	半纏
大 磯	飯田一夫氏	電卓
大 磯	南那津子氏	アオバト標本
大 磯	寺井良廣氏	古文書 他
大 磯	野島嘉章氏	認定証 他
東小磯	安田建一氏	安田善次郎邸設計図面
国府本郷	山口 進 氏	本箱、書籍
国府本郷	加藤登思枝氏	編み機、アイロン 他
国府本郷	山田裕示氏	土器 他
国府本郷	山口 修 氏	テレビ、箆筥 他
国府新宿	露木利光氏	トックリバチの巣
月 京	大川秋俊氏	掛軸
生 沢	岩崎侯橘氏	ジュエロータ
虫 窪	柳下 清 氏	醤油のもろみ桶
二宮町	西山敏夫氏	古文書、木銃 他
二宮町	川島啓司氏	五月人形
平塚市	今井きみゑ氏	貝標本

【表紙写真】

珧瑯（ほうろう）製の看板。珧瑯とは、鉄の素地に釉をかけて焼き、ガラス質にして表面を覆ったもの。丈夫で色鮮やかなため人気があった。特に昭和30～40年代にかけてが全盛で、農家の物置や商店の軒先、バス停、電柱など、人目につくところには必ず貼られていた。当時を知る人々にとって、珧瑯看板のある風景は実になつかしいものである。写真の看板は中井町の交差点脇の物置に貼られていたもの。現在、当館で保管している。

▼企画展記念講演会（無料、当日先着50名）

『土器からみた弥生のあけぼの』

11月28日（日） 午後1時30分～3時

講師 小田原市教育委員会 大島慎一氏

▼春季企画展

『学習参考資料展／かわってきたくらしの道具』

平成12年1月16日（日）～3月26日（日）

小学校3年生の社会科学習に合わせた展示をおこなっています。時代とともに変わってきたさまざまな道具から、その時々のかつくりのようすを見ていきます。

平塚市	石橋直子氏	砂（相模川産）
秦野市	匿名	ソロバン、カルタ
山北町	茂木直人氏	砂（酒匂川産）
横浜市	守屋靖子氏	絵はがき、案内書
小田原市	星野喜三郎氏	焼酎瓶 他
小田原市	塩海加代子氏	砂（稲村ガ崎産）
藤沢市	込山智子氏	冷蔵庫 他
J R大磯駅		テーブル、イス
（移 管）		
都市計画課		地盤調査報告書
総務課		地質・土質標本 他
（購 入）		
すりもの堂書店		錦絵、絵はがき
（寄 託）		
西小磯	渡辺長吉氏	鎌倉囃子道具一式

〈寄託期間：～H12.3.31〉

Report—大磯町郷土資料館だより—No18・19

平成11年10月30日

編集発行 大磯町郷土資料館

〒255-0005 神奈川県大磯町西小磯446-1

TEL 0463 (61) 4700

FAX 0463 (61) 4660